

悲しい昔話⑧ 『消毒』

半世紀ほど前、私も中学生でした。当時、学校のすぐそばにわが家の田んぼがあり、私は自分の意志とは無関係に田んぼの手伝いをさせられました。わが家は農業が生計の中心でしたから、病弱だった父親の代わりに私が田んぼの手伝いをすることには小さいころから何のためらいもありませんでした。ただ、中学校のすぐとりにある田んぼの手伝いだけは正直やりたくなかった。生徒のほとんどがまだ部活動で汗を流している横で同じ中学生である自分が家業とはいえ、田植えや稲刈りの手伝いをすることに抵抗がありました。

しかし、私の母親にはそんな配慮は全くありませんでした。なぜならそれが一家の生活の糧だったからです。「いやなら食うな」が彼女のがんこなまでの信条であり、教育方針でした。

ただ、私が学校のとりにある田んぼの手伝いが本当にいやだったのにはもう一つ別な大きな理由がありました。

中学1年生の2学期が始まった早々のことだったかと思います。秋晴れの好天のある日、教室の窓には秋のさわやかな風が流れ込んでいました。昼休みの教室からは笑い声が聞こえたり、時には追っかけ回してふざけっこをしているものもいます。

ところが先ほどまでのなごやかな教室の雰囲気が一変しました。心地よい風が急に鼻をつくような臭いに変ったのです。あちこちから「何やこの臭い！くせー」、「くせえー」、「息できんー」

確かに強烈なおいが風に運ばれて教室に充満してきました。誰かが「窓しめー」と叫びました。一人の子が窓際へ走って行って窓の外に向かってどなりました。「こんなところで(稲の)消毒すんなまー」

いやな予感がしておそるおそる首を伸ばして窓の外へ目をやりました。やっぱり！

母親が一人で消毒の機械を背負ってマスクもしないで一心に稲の消毒をしていました。

私が明るく笑って「ごめんごめん、うちのかあちゃんや」と言えばクラスの連中はきっと許してくれたはずです。でも、私はその時は言えませんでした。黙って5時間目のチャイムを待つのが精一杯でした。

その日以来、私は学校のとりにある田んぼの手伝いができなくなりました。

一人で家計をきりもりしている母親の手助けをしたい気持ちはあったのですが、まだ生徒が学校に残っている時間帯にこの田んぼの手伝いをすることだけは母親が何と言おうとかたくなに拒否しました。わかってもらえるでしょうか。

その母親が今年82歳で親不孝者の息子が今月で父親が亡くなった年齢(還暦)になります。

